

中学校英語の「今」と「これから」

国分寺市立第三中学校校長
重松 靖

この20年間、外国人講師の導入やコミュニケーション重視の指導等、英語教育は急激な変化を遂げた。そして今、小学校外国語活動が本格化、中学校では英語の授業時数も週4時間となり、3年間の総授業時数では全教科の中でもっとも多い教科になろうとしている。ある意味では、これまで以上の変革期を迎えようとしていると言ってもよい。こうした時期に、現在の英語教育の実態を「教員調査」「生徒調査」から明らかにし、英語教育のあり方を探ることは意義深い。

ここでは、主に「教員調査」の結果から分析、提言したい。

1 指導の実態

元来教員はまじめである。保護者・地域・社会からの期待に応えようとしている姿がデータから読み取れる。しかし、多忙感は否めず、授業の準備や英語力・指導力向上のための研修を受ける時間の不足、若手教員の増加や生徒たちの意識の変化など課題も多い。期待に十分応えきれない教員のジレンマを垣間見ることができる。

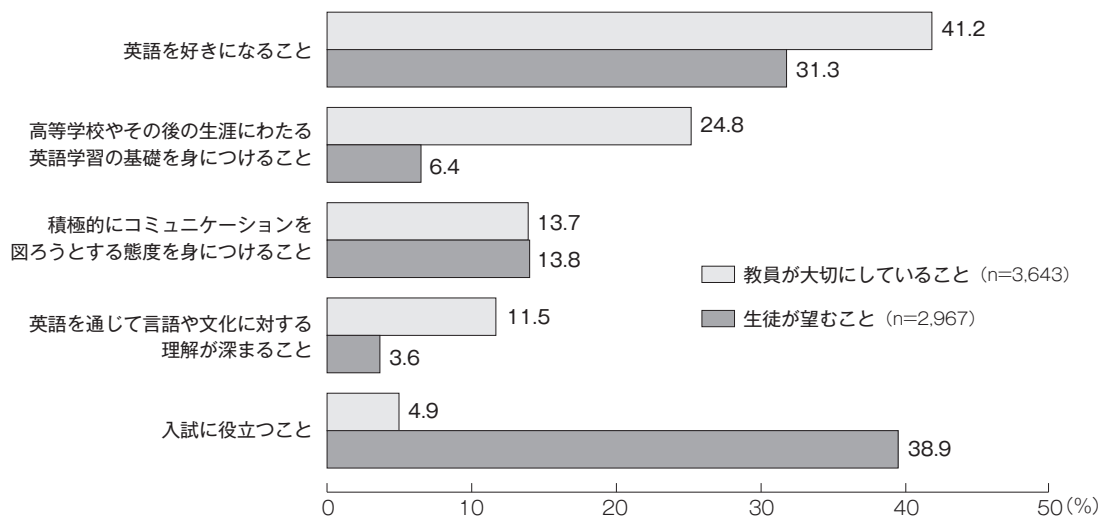
1) 教員は将来を、生徒は入試を重視

英語を自由に運用できるようになるためには、将来にわたって英語を学び続けなければならない。そのためにも「生徒が英語を好きになるように指導する」(41.2%)、「高等学校やその後の生涯にわたる英語学習の基礎を培う」(24.8%)ことを重要視して指導しているという教員の意識は当然のことだろう(図1-1)。一方、「生徒調査」によると、受けたい英語の授業

については「入試に役立つ授業」がトップで38.9%である。さらに、「英語が好きになる授業」を望む生徒が31.3%と続く。この数字は、言い換えると「今は英語が好きではない」ということかもしれない。実際、「英語」を好きな教科として回答した生徒は、「国語」に次いで低い25.5%である(図表省略)。皮肉にも教員の意図とは全く逆の結果になってしまっている。

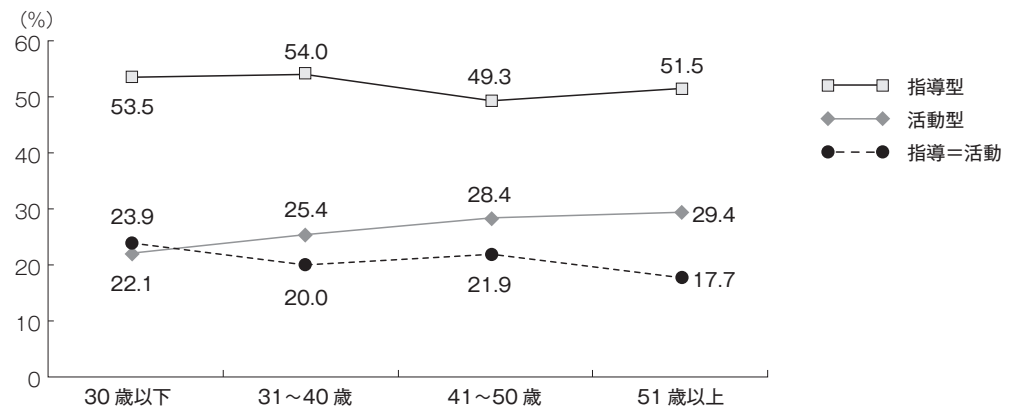
生徒にとって高校入試は最大の関心事であり、英語を入試科目としてしかとらえられないことは仕方がないのかもしれない。教員も受験を意識し、文法等の説明に時間をかけてしまうことも無理からぬことだろう。しかし、コミュニケーションの手段である「言語としての英語の指導」を通して、人と温かく触れ合い、世界の人々のさまざまな生活や多様な価値観を知ることが、生徒の知的好奇心を満足させるだけでなく、豊かな人間性を培う上でも大切なことである。そういうことを通して結果的に生徒は英語を好きになるのではないだろうか。

図1-1 教員が大切にしていること、生徒が望むこと



注1) 各項目は、「教員調査」と「生徒調査」とで表現が異なるため、共通の項目を新たに設定した。
 注2) 「教員調査」では、上から「生徒が英語が好きになるように指導する」「高等学校やその後の生涯にわたる英語学習の基礎を培う」「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する」「英語を通じて言語や文化に対する理解が深まるように指導する」「入試に役立つように指導する」としている。
 注3) 「生徒調査」では、上から「英語が好きになる授業」「高等学校やそれ以降の英語学習に役立つ授業」「積極的なコミュニケーション能力が身につく授業」「言語や文化に対する理解が深まる授業」「入試に役立つ授業」としている。
 注4) 「その他」「無回答・不明」は省略。

図1-2 指導のタイプと年齢の関係



注1) 「授業で、先生が説明している時間と、生徒が活動している時間の割合は、平均してどのくらいですか。例：10対0（先生対生徒）」という質問で、「10対0」~「6対4」と回答した人を「指導型」、「5対5」と回答した人を「指導=活動」、「1対9」~「4対6」と回答した人を「活動型」とした（以下同）。
 注2) 「30歳以下」は「25歳以下」「26~30歳」の合計。「51歳以上」は「51~60歳」「61歳以上」の合計。
 注3) 「無回答・不明」は省略。
 注4) 「主に担当している学年」を回答した3,387名のみ対象。

2) 年齢が高くなるほど「活動型」の教員が増える
 授業中に教員が指導・説明する時間と生徒が活動する時間の割合をたずねたところ、指導・説明する時間の方が長い「指導型」の教員が51.8%、活動する時間の方が長い「活動型」の教員が26.5%、「5対5」（指導=活動）と答えた

教員は21.0%であった。
 興味深いのは年齢の高い教員の方が「活動型」の割合が高いということである（図1-2）。ベテランの教員は、経験上多くの言語活動の知識があり、説明のポイントも心得ているが、若手の教員は指導のポイントを絞れず長々と説明を

してしまう傾向が強いと思われる。

一方、生徒側はどのように受け止めているのだろうか。「生徒調査」によると、自分が受けている授業が「指導型」か「活動型」かをたずねたところ、「指導型」と答えた生徒は70.7%、「活動型」と答えた生徒は27.8%と、生徒の7割が「指導型」の授業を受けていると感じている⁽¹⁾。「教員調査」と「生徒調査」の調査対象校は同一ではないため、一概に比較することはできないが、教員が、生徒に活動させていると思っている内容が、本当に生徒一人ひとりの活動量を確保しているものかどうか、見直してみる必要がある。文型練習では、数名の生徒に言わせて終わり、Q&Aも教師と生徒の一对一で、あとの生徒は聞いているだけ、という授業をよく見かける。全体→個→全体というサイクルで、テンポよく活動させ、生徒の活動量を増やす工夫をしたい。

3) 年齢が低く「活動型」の教員は英語の使用割合が高い

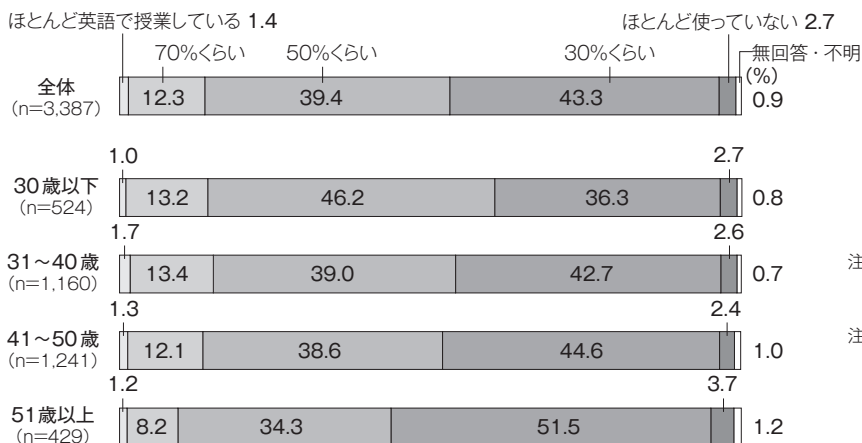
授業における英語の使用割合をたずねたところ、53.1%の教員が半分以上英語を使用していると答えている（「ほとんど英語で授業している」+「70%くらい」+「50%くらい」の%、以下同）。これを年代別にみると、「51歳以上」が43.7%であるのに対し、「30歳以下」では60.4%と、年齢が低いほど英語の使用割合が高くなっている（図1-3）。また、「活動型」「指導型」別で

みると、「指導型」の45.2%、「活動型」の66.6%の教員が半分以上英語を使用していると答えている（図表省略）。「活動型」で年齢の低い教員の方が、英語の使用割合が高いということになるが、「聞くこと」や「話すこと」よりも文法訳読中心の英語教育を受けてきた40代以上の教員と、ALTの導入やコミュニケーション重視の英語教育を受け、大学における英語教育や教員養成課程でコミュニケーションとしての英語を学んできた30代以下の教員の差であろう。このことは、教員が受けたい研修として「自分自身の英語力を高める研修」と回答する比率が、年齢とともに上昇していることからわかる（図表省略）。

4) 指導方法 ～「指導型」は文字、「活動型」は音声重視～

指導方法についてタイプ別に比較してみた（図1-4）。「指導型」が「活動型」を5ポイント以上上回るものは、「文法の練習問題」「英作文」「教科書本文の和訳」など文法や、英文解釈・英作文である。一方、「活動型」が「指導型」を5ポイント以上上回るものは、「ペアワーク」「グループワーク」「発音と綴りとの関連づけ」「英語による教科書本文の口頭導入（オーラルイントロダクション）」「教師による small talk（英語での簡単な雑談）」「スピーチ・プレゼンテーション」「手紙や日記などを書く活動」「ディクテター

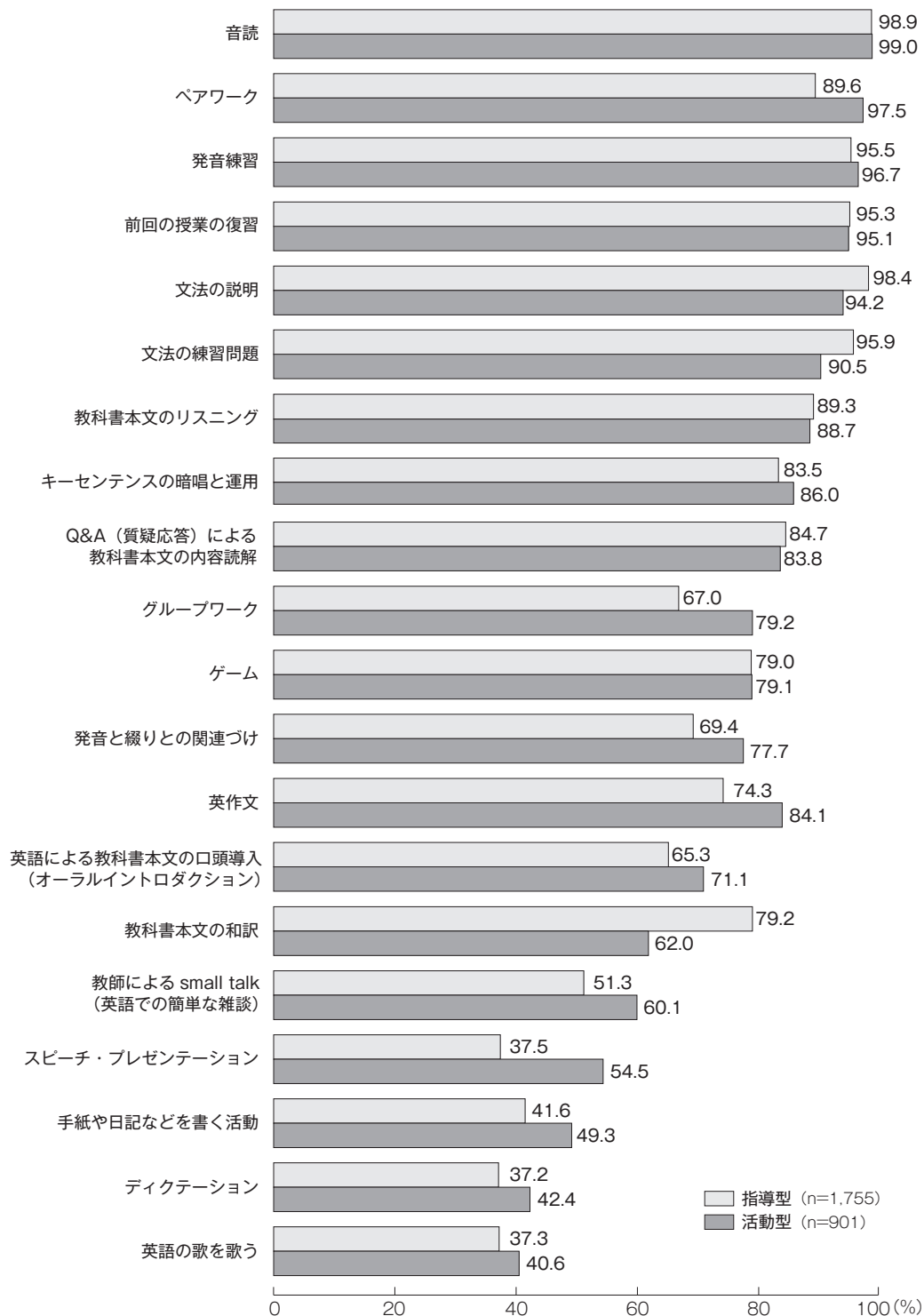
図1-3 授業での英語使用割合（全体・年齢別）



注1) 「主に担当している学年」を回答した3,387名のみ対象。

注2) 「30歳以下」は「25歳以下」「26～30歳」の合計。「51歳以上」は「51～60歳」「61歳以上」の合計。

図1-4 指導方法（指導タイプ別）



注1) 「よく行う」+「ときどき行う」の%。

注2) 「指導=活動」「無回答・不明」は省略した。

ション」など圧倒的に音声重視である。

「生徒調査」によると、自分の受けている授業は「指導型」と回答した生徒の中で「英語が好き」と答えた生徒は23.7%であるのに対し、「活動型」で「英語が好き」な生徒は30.3%である（図表省略）。「活動型」の授業の方が生徒を英語好きにすると言ってもよいかもしれない。

5) 「活動型」「指導型」とも Reading を重視しているが、生徒は苦手

1 単元中の言語活動の割合をたずねた⁽²⁾。現行学習指導要領では言語活動のうち、「特に聞くこと及び話すことの言語活動に重点をおいて指導すること」としているが、実際には70.4%の教員が「よくしている」活動として Reading と答えており、他の言語活動と比べて大きな開きがある（図表省略）。指導タイプ別にみると、とくに「指導型」の教員では Reading と Speaking の差は、実に42.8ポイントになる（図1-5）。新学習指導要領では「聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力を総合的に育成」することが求められており、バランスのとれた言語活動を行うことが課題と

なる。

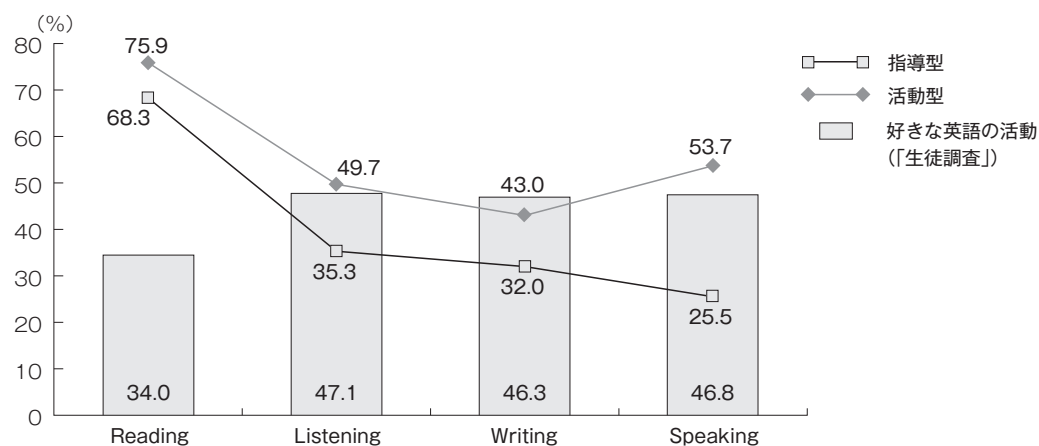
6) Reading の指導は教科書の訳読が中心

では、多くの教員が行う Reading の指導とは具体的にどのような活動なのだろうか。授業において行う指導方法について、とくに Reading に関する活動をみてみると、「音読」は98.8%、「Q & A（質疑応答）による教科書本文の内容読解」は84.0%、「教科書本文の和訳」は73.0%の教員が「よく行う」または「ときどき行う」と回答している。また、授業で使用する教科書以外の教材についてたずねた結果、「多読用の読み物」や「英字新聞や英語の雑誌」と回答した教員は「よく使う」と「ときどき使う」を合わせてもそれぞれ14.2%と7.5%に過ぎない（図表省略）。

こうした数字から、多くの教員が行っている Reading 指導とは、講義形式や一問一答による教科書本文の訳読と考えられる。

一方、「生徒調査」の結果によると、好きな言語活動は、Listening、Writing、Speaking がほぼ同じであるのに、Reading が「好き（とても+まあ）」と回答した生徒は34.0%と最も低い（図1-5）。教員がもっとも力を入れている Reading の指導が、実は生徒が一番嫌い、とい

図1-5 教員がよくする活動・生徒が好きな活動（指導タイプ別）



注1) 折れ線グラフは、「教員調査」の「生徒の活動についてうかがいます。1単元でみたときに、次のような活動を生徒はどのくらいしていますか」という質問で、それぞれ「読む活動 (Reading)」「聞く活動 (Listening)」「書く活動 (Writing)」「話す活動 (Speaking)」について「よくしている」と回答した比率。

注2) 棒グラフの数値は、「生徒調査」の「あなたは次のようなことは好きですか」という質問で、それぞれ「英語で文章や本を読むこと (Reading)」「英語を聞くこと (Listening)」「英語で書くこと (Writing)」「英語で話すこと (Speaking)」について「とても好き」「まあ好き」と回答した比率。サンプル数は2,967名。

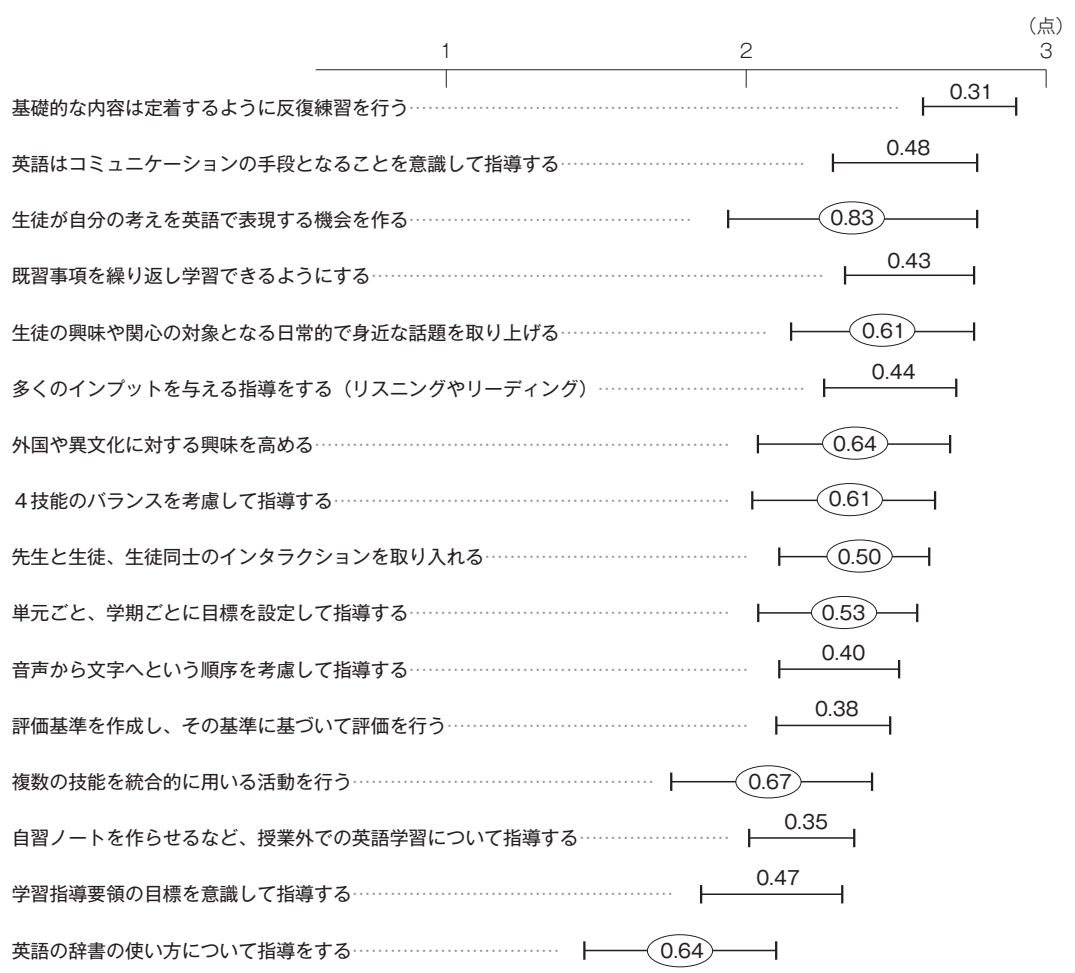
う結果である。講義形式や一問一答による指導形態が生徒にとっては不評のようだ。Reading指導の工夫・改善が求められる。

7) 反復練習はよく行うが、自己表現・総合的な言語活動が課題

「指導で重要だと思うこと」と「実行していること」を比較したところ、「生徒が自分の考えを英語で表現する機会を作る」「生徒の興味や関心の対象となる日常的で身近な話題を取り上げる」「外国や異文化に対する興味を高める」「4技能のバランスを考慮して指導する」「先生と生徒、生徒同士のインタラクションを取り入れる」などが、重要だと思いながらも実行できていない。一方、「基礎的な内容は定着するように反復練習を行う」「英語はコミュニケーションの手段となることを意識して指導する」「既習事項を繰り返し学習できるようにする」「多くのインプットを与える指導をする（リスニングやリーディング）」などはよく実行されている（図1-6）。「英語はコミュニケーションの手段」として指導してはいるが、週3時間という授業時数では、目標となる言語材料の定着と、リスニングやリーディングといった「理解の能力」の指導に

徒、生徒同士のインタラクションを取り入れる」などが、重要だと思いながらも実行できていない。一方、「基礎的な内容は定着するように反復練習を行う」「英語はコミュニケーションの手段となることを意識して指導する」「既習事項を繰り返し学習できるようにする」「多くのインプットを与える指導をする（リスニングやリーディング）」などはよく実行されている（図1-6）。「英語はコミュニケーションの手段」として指導してはいるが、週3時間という授業時数では、目標となる言語材料の定着と、リスニングやリーディングといった「理解の能力」の指導に

図1-6 指導で重要だと思うことと実行していることとのギャップ



注1) 数値は、「指導で重要だと思うこと」をたずねる質問で、「とても重要」3点、「まあ重要」2点、「あまり重要ではない」1点として算出した平均値から、それぞれについて「どの程度実行しているか」をたずねる質問で、「十分実行している」3点、「まあ実行している」2点、「あまりしていない」1点として算出した平均値を引いたもの。「重要だと思うこと」と「実行度」とのギャップをみることができる。
 注2) 図は、「重要だと思うこと」の平均値の高い順に並べている。
 注3) ○は、差が0.50以上あるもの。

多くの時間が割かれている現状がみえる。

新学習指導要領では、週4時間となり時間的にも余裕が生まれる。インプット中心の授業から、外国や異文化に対する興味を高める指導も含め、バランスのとれた指導が、授業改善の大きな視点となる。

2 これからの英語教育

小学校における「外国語活動」が導入される。英語によるコミュニケーションの楽しさを十分味わい大きな期待を抱いて中学校に入学してくる生徒もいる反面、小学校時代にすでに挫折し「英語嫌い」になって入学してくる生徒もいるはずである。「生徒調査」によると、どの教科が好きかをたずねた質問（複数回答）で「英語」と答えた生徒は約25%であった。また、英語が得意か苦手かをたずねた質問では60%を超える生徒が英語が「苦手（やや+ととも）」と回答している。授業時数がすべての教科の中で一番多くなる英語の授業を質的に改善しなければ、「期待派」「挫折派」の両方から失望され「英語嫌い」をますます増加させるだけでなく、学校生活自体も楽しいものではなくなくなるとしてもよい。中学校の英語科教員に課せられた期待はこれまで以上に大きいことを自覚しなくてはならない。

以下、「教員調査」と「生徒調査」からみえた課題を整理し、あるべき姿を考えたい。

1) 授業そのものをコミュニケーションの場～ Teaching English in English ～

「生徒調査」によると、生徒が受けてほしい英語の授業は「入試に役立つ授業」（38.9%、図1-1）、将来、身につけたい英語力は「英語でよい成績がとれるくらいの英語力」（27.5%、図表省略）が、それぞれもっとも多い。英語は言語であり、言語はコミュニケーションの大切な手段であるということの意識が低く、英語＝入試・試験という考えが強い。こうした意識を変えるためには、授業そのものを英語によるコミュニケーションの場に変えなければならない。英語がコミュニケーションの手段であるということを実感させ

る最良の方法である。

2009年3月に告示された高等学校の学習指導要領では、「生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とする」（下線筆者）とした。「教員調査」では、授業において半分以上英語を使用する（「50%くらい」+「70%くらい」+「ほとんど英語で授業している」）と回答した教員が53.1%いるが（図1-3）、その内容の大部分は「Open your books to page…」や「Listen to the CD carefully.」など classroom Englishで終わっていないだろうか。

新学習指導要領では「学習内容を繰り返して指導し定着を図る」ことや「実際に言語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合うなどの活動を行う」ことを求めている。指導した内容を一番よく知っている教員が、既習の文法事項や表現・語彙をふんだんに取り入れた small talk をしたり、目標文・教科書本文の oral introduction を生徒との生き生きとしたインタラクションを通して行うことは重要である。また、生徒同士の言語活動も機械的な情報伝達に留まることなく自分の考えや意見、経験や夢・希望など自己表現につながる内容を含めることは表現力を育むためにも欠かせないことである。こうしたことを通して、英語は言語でありコミュニケーションの大切な手段なのだということを実感させたい。

2) 音声指導の充実

小学校英語と中学校英語の大きな差は発音と文字だろう。とくに、正しい発音については小学校ではきちんと指導されていないと考えるべきである。「教員調査」によると、「発音練習」を「よく行う」教員は75.1%、「ときどき行う」教員は20.8%と、合わせて95.9%の教員が行っている（図表省略）。しかし、その多くは教員やALT、CDの後について単に発音させるだけというものではないだろうか。

[b]と[v]、[l]と[r]、[h]と[f]などの音の違いを、きちんと説明し意識的に繰り返し練習させることや英語のリズム・イントネーションを意識して発話させたり、音読させたりすることは、

学級担任が指導することが多い小学校外国語活動と、英語教育のプロが指導する中学校の英語教育の違いを生徒に実感させることができるはずである。

3) 文法指導と一体化した統合的な言語活動 ～ 何ができるかを最終目標に ～

「教員調査」によると、「文法の説明」を「よく行う」と回答した教員は71.1%、「ときどき行う」26.0%を含めると97.1%に達する。一方、「生徒調査」では、「文法が難しい」（「あてはまる（とても+まあ）」）と回答した生徒は78.6%と英語学習でつまずきやすいポイントについてたずねた質問(11項目)のうちもっとも高い。生徒にとって文法とは、「理解しなければならぬ難しいもの」となっている。

新学習指導要領では、「文法については、コミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、言語活動と効果的に関連づけて指導すること」（下線部筆者）としているが、多くの教員は文法を最終目標ととらえ、言語活動はその定着のためのドリル、という意識がまだまだ強いのではないだろうか。したがって、その言語活動も実際のコミュニケーションとは遊離した機械的・操作的な内容になりがちで、生徒は単なる学習活動としてしか受け止めていないのではないだろうか。新学習指導要領の趣旨を生かすためにも、新出文型・文法の「機能」を考え、「何ができるか」を最終目標として授業を組み立てる必要がある。

たとえば、

- 新出事項を、教師のoral introduction や生徒との生き生きとしたインタラクションを通して導入する。
- 自然な流れを崩さぬよう、細かな文法の説明はせず、意味の確認程度に留め、repetition、pattern practice などのmechanical drill を行う。その際、全体で言わせたら数名の生徒に言わせ、さらに全体で言わせる、など全体→個→個→個→全体のようにリズムカルにテンポよく行わせ、十分な口頭練習を行う。

- ペアワークやグループワークなど学習形態を工夫しながら information gap を用いたり、ゲームの要素を加味したmeaningful drill へと移行する。その際、必ず、生徒が自分自身のことを表現できる内容を含ませる。
- 最後に、既習の文構造などと比較しながら文法事項を整理し理解を深めさせる。といった指導過程が考えられる。

input からoutputへ、mechanical drill からmeaningful drill へ（controlled からless controlledへ）、そして、最後に現実のコミュニケーションを意識した communicative activities へ、という手順が大切である。

小学校での「外国語活動」ではこれまで中学校で行ってきたような言語活動をすでに行っている。中学校でも「～ごっこ」的な言語活動に終始しては、生徒はそっぽを向いてしまう。単元の題材や文法事項の「機能」と「場面」を考え、現実のコミュニケーションとしてありそうな活動を行いたい。

なお、言語活動では、われわれが日常生活で普通に行っているように「聞いたり読んだりして得た情報を使って話したり書いたりする」というように、統合的な言語活動 — integrated skills activities — にすることを意識したい。

4) Reading 指導の改善 ～能動的に英文と格闘する active reading の基礎を～

「1.指導の実態」でも述べたように、現在行われているReading の指導は、新出文法や語彙を理解した後に読みの活動に入る bottom up 方式であり、本文を一文一文理解しながら読み進むintensive reading（精読）である。こうした指導ばかりでは、生徒は未知語に遭遇すると不安にかられ読むことを止めてしまう。

しかし、われわれがふだん新聞や小説などを読むときには、一つ一つの語や文の意味にはさほど注意を払わず読み進め、内容を理解していく。こうした読みを、extensive reading（多読）と呼び、ざっと目を通し全体の内容をつかむskimming や特定の情報を素早く見つけるscanning という skills を必要とする。ところが、

こうした指導はほとんどされていない。

主たる教材である教科書には、1ページごとに新しい文法事項および語彙が多く含まれ reading の教材としてふさわしいとは言えないが、せめて基本文を理解した後に教科書本文の概要をつかみ、新出語彙や表現の意味を類推させる top down 方式を取り入れたい。こうした観点からすると、現在多くの教員が予習として課している「新出単語の意味調べ」(77.5%)、「教科書本文の書き写し」(63.9%)等はすべきではない(図表省略)。そもそも家庭学習では復習に重点を置き、予習はさせない方が授業は生き生きとしたものになるのではないだろうか。

また、時として、教科書以外の多読用の読み物教材を使い、“reading is a psycholinguistic guessing game”を実感させたり、英字新聞や雑誌など authentic なものを教材化し、スポーツの結果や天気予報、電話番号などを素早く見つけさせる scanning の指導も取り入れたい。英文を受動的に読むだけでなく、能動的に英文と格闘する active reading の基礎作りは、中学校段階からできるはずである。

5) Writing 指導の改善 ～毎時間たとえ一文でも書く活動を～

「生徒調査」によると、72.0%の生徒が「英語の文を書くのが難しい」(「あてはまる(とても+まあ)」、以下同)と回答し、「教員調査」においても、生徒が英語を苦手と考えている原因として58.3%の教員が「文や文章を書くことが苦手」(「とてもあてはまる」の%)だからと答えている(図表省略)。平成15年に実施された文部科学省の教育課程実施状況調査においても「書くこと」の「トピック指定問題」では無回答率が、1年26.0%、2年25.6%、3年33.7%と高い数値を示しており、いずれも「書くこと」の指導の重要性を表している。

新学習指導要領では、「書くこと」の言語活動の内容を整理して「語と語のつながりなどに注意して正しく文を書くこと」が加わった。これは、「正しい語法や語順で」文を書くことである。これまで、多くの教員は「書くこと」を

「まとまった英文を書くこと」と考えがちでなかなか指導する時間を確保できなかった。しかし、一つでも二つでも、生徒が自分の意志で正しく文を書く活動を毎時間行うことが大切である。基本文を参考に自分のことを書いてみる、教科書本文で一番大切だと思った文や一番印象に残った文を、できれば感想や理由を含めて書いてみる、といった活動を個人やペアワーク、グループワークで継続することが、同じく新たに学習指導要領に加わった「文と文のつながりなどに注意して文章を書くこと」につながる。

6) Testing の改善 ～振り返りができるテストへ～

生徒は正誤がはっきり示され、しかも点数というかたちでフィードバックされるテストで自らの英語力を評価している。「何ができなかったのか、何を補えばよいのか」はさほど重視されず、何点とれたかが最大の関心事になってしまっている。こうした評価・評定のためのテストから、生徒自身が自らの課題や目標を明らかにできるテストに変えることにもっと関心を払う必要がある。

「生徒調査」によると72.7%の生徒が「英語のテストで思うような点数がとれない」(「あてはまる(とても+まあ)」、以下同)と回答し、78.6%の生徒が「文法が難しい」と回答していることから、多くの学校で文法中心のテスト、それも正確さに重きを置いた評価が行われていることが考えられる。

前述したように、文法が最終目標ではなく「何ができるのか」を最終目標とするならば、実際にその活動をさせて評価をしなければならない。たとえば、「将来の夢についてスピーチができる」という目標を設定したならば、実際にスピーチをさせ評価する。その際、①明瞭な音声 ②アイコンタクト ③英語らしい発音・リズム・イントネーション ④わかりやすさ ⑤内容・豊かな語彙の運用 ⑥文法の正確さ など複数の観点から評価することが生徒にとっては親切であるし、意欲も喚起される。Writing についても同じような観点を設定し評価してあげたい。

中間テストや期末テストは生徒にとって大きな意味をもつ。紙ベースで行うため文法問題が多くなってしまいがちではあるが、次のような点に留意したい。

- ① 問ごとにテストポイントを明確に示す
多くの教師は穴埋め、適語補充など出題形式ごとに大問を設定し、その内容も語彙やさまざまな文法事項が混在するものになっている。これでは、生徒が、自分にとって何が課題なのかわからない。「文法：不定詞」「語彙：前置詞」などのようにテストポイントごとに大問を設け、はっきり明示したい。
- ② テストポイントに合った出題形式にする
語順の理解度をみるならば、英文を書かせる必要はなく、記号で答えさせれば十分である。「聞く力」を測るときに英文を読ませたり、英語を書かせるなど他の要素を含ませることは妥当性に問題があり不適切

である。何を測りたいのか、そのためにはどのような形式が妥当かを吟味したい。

③ 長文総合問題は不適切

長文総合問題はテストポイントを明確に示すことができないだけでなく、読解力をも測ることはできないので避けるべきである。

④ できるだけコミュニケーションを意識させる

定期テストといえども、コミュニケーションを想定させるものにすることは英語＝コミュニケーションの手段という意識をもたせるためには有効である。単に、「英文を聞き次の質問に答えなさい」という設問の仕方ではなく、「あなたはロンドンの〇〇動物園に来て園内放送を聞いています。放送を聞いて、閉園時間や食事の場所について聞き取りなさい」などのように、誰が、何のために聞いたり、読んだりするのか示してあげたい。

<注>

- (1) 「生徒調査」で、「学校の英語の授業では、先生の説明を聞いている時間と、自分たちが英語を使って活動する時間と、平均するとどちらの方が多ですか」という質問で、「先生の説明を聞いている時間の方が多」「どちらかといえば先生の説明を聞いている時間の方が多」という回答を「指導型」、「自分たちが活動する時間の方が多」「どちらかといえば自分たちが活動する時間の方が多」という回答を「活動型」とした。
- (2) 「教員調査」で、「生徒の活動についてうかがいます。1単元でみたときに、次のような活動を生徒はどのくらいしていますか」という質問で、4技能（読む、聞く、話す、書く）についてそれぞれ4件法（「よくしている」「ときどきしている」「あまりしていない」「まったくしていない」）でたずねたうち、「よくしている」と回答した比率は、Readingは70.4%、Listeningは40.3%、Writingは36.1%、Speakingは36.0%だった。

[参考文献]

高梨庸雄・高橋正夫, 1987, 『英語リーディング指導の基礎』 研究社出版。

根岸雅史・東京都中学校英語教育研究会編, 2007, 『コミュニカティブ・テストングへの挑戦』 三省堂。